

青年心理に関する2, 3の研究* (第2報告)

1961年9月1日受付

岡本 奎 六**

第一部 青年の態度に関する研究

〔研究の目的〕

クーレンとアーノルドの調査によると、アメリカの青年前期に当る人々の67%が、「教会に行かない」と答えている。児童期の宗教的習慣を否定するようなこの種行動傾向は、なぜ青年前期に著しく現れてくるか。それは青年期になると、あまりにもドグマ的な児童期の宗教には、もはや満足できなくなり、宗教的疑惑や反抗心が持たれるからであろう。

青年前期には、児童期の宗教に疑惑や反撥を感じる反面、熱心に宗教を求め追及するという、1見矛盾した傾向も見られる、そのことは、同じ調査の中で、約50%のものが「宗教の意味を知りたい」、「宗教と科学の矛盾に悩む」という答をしている例でも明らかである。青年前期に見られるこうした1見矛盾した宗教的態度は、宗教的態度を確立するための1発達段階であり、精神発達の過程に見られる1般的傾向を示すものといえよう。

このような青年前期に続く青年中期・青年後期に当る高校生・大学生は、どのような宗教的態度を持っているか。その実態を捉えることが、本研究の第1の目的である。

宗教的態度の確立は、単に個人の宗教的生活の領域に影響するだけではない。その影響するところは、度く日常生活の各領域にまで及ぶであろう。宗教とはそのように全人格的な影響を及ぼすものだからである。日常的生活態度の中でも、とくに禁欲的生活態度・平和主義的生活態度・人命尊重の生活態および人間の平等主義的生活態度などは、多かれ少なかれ宗教的態度と関連性を持つことが考えられる。

本研究の第2の目的は、宗教的態度との関連において青年のそのような生活度の実態を明らかにすることにある。

〔研究の方法〕

先ず調査用具として、本稿末尾附録の「意見調査用紙」を作製して用いた。1848年5月に予備実験を

行ない、これを修正したものがこの附録の「意見調査用紙」である。この用紙について簡単な説明を加えると、つぎのとうりである。

用紙の第1面これは附帯的な調査であり被験者の所属や背景について若干の知識を得るのがその目的である。第1面のうち(3)信仰する特定宗教の有無と(4)信仰の強さに関する調査だけは、詳細な統計処理を行ない、後に示してある。

用紙第2面。こゝには問題(Iの1)から(Iの12)まで12項目の問題が記してある。たとえば、(1の5)は「人間の肉体は死によってほろびるが、人間のたましいについても同じことで、「靈魂不滅」(たましいはほろびないこと)は信じられない」となっている。この意見に対して、被験者は「非常に賛成」から「絶対に反対」にいたる5段階尺度のいずれかに答えるようになっている。このような宗教的態度の強さを測定し得ると考えられる1項目の問題が、第2面である。採点に当っては、各問題とも宗教性の強さを表わすと考えられる順に、被験者の解答を5点から1点までの5段階点に点数化した。

第3面。こゝには宗教性に関連があると考えられる生活態度の強さを測定すると考えられる、12項目の問題が記してある。附録の用紙の(IIの1)から(IIの12)までがこれである。問題例として(IIの1)をあげると「あなたは酒やたばこは好きであっても、これらは止めるべきである」となっている。この意見に対する賛否を5段階のいずれかで述べさせ5点法の採点処理を行なうという点は、第2面の場合と同様である。なお第3面の各項目はいずれも宗教性に関連ある生活態度を測定する問題であるが、これをさらに細分するとつぎのとうりである

(IIの1)～(IIの3) 禁欲的生活態度の問題項目
(IIの4)～(IIの6) 平和主義的生活態度の問題項目
(IIの7)～(IIの9) 人命尊重の生活態度の問題項目
(IIの10)～(IIの12) 人間常等主義の生活態度の問題項目

本研究の被験者は大学高等学校の学生生徒234名である。高校大学とも、キリスト教および仏教の宗教系学校と、一般の学校とにわかれている。これらの被験者の所属する学校は、つぎの19校である。

東京A大学、全R大学、全S女子大学、全T女子大学、全R大学、全K大学、全R女子短期大学、全T女子短期大

* Some Psychological Studies on Adolescence

**Keisoku Okamoto

学，全T大学，全G大学京都G大学，全K大学東京G高校
全R女子高校，全T女子高校鹿兒島A高校。

本調査の実施は1954年12月から本年1月にかけて行な
われた。筆者が直接実施した学校もあるが，当該学校も
あるが当該学校の教師に実施要領を説明し，適当な餘暇
に実施していただく形式もとった。

〔研究結果その1〕青年の宗教的態度について

1. 宗教的態度に関する各項目の分析

附録の調査用紙第2面の(Ⅱの1)から(Ⅱの12)
までの宗教的態度の調査項目を分析したのが1表であ
る。表によるとキリスト教系大学男子の，項目1の人間
性の弱さの欄を見ると3.76とある。これはすでに〔研究

の方法〕のところで述べた採点処理方法を用いて集計し
た値である。つまり，人間性の弱さを肯定する割合の
強さに応じて5点から1点までの配点を行ない，集団の
得点平均を求めたものである。したがって，集団の平均
が3.00の時が人間性の弱さを肯定も否定もしない，いわ
ば中間的な位置である。3.76のように3.00をかなり上ま
わる時には，人間性の弱さを集団全体としてはかなり強
く肯定していることを示す。なお，理論的には完全な肯
定はこの値が5.00の時であり，完全な否定は1.00の時であ
る。

さて，以上のような規準により，表1の各項目を見る
と，つぎの3つの型がわけられよう。

(1) 肯定的態度が比較的明確な項目

(表1) 宗教的態度の強さ

	大 学 生								高 校 生							
	キリスト教系		仏教系		一 般		全 体		キリス ト	仏教系		一 般		全 体		
	男	女	男	女	男	女	男	女	女	男	女	男	女	男	女	
1 人間性の弱さ	3.76	3.64	3.36	3.24	3.59	3.62	3.57	3.40	3.92	3.19	3.64	3.30	3.67	3.24	3.74	
2 人知の有限性	2.37	2.48	2.83	3.02	2.31	2.61	2.60	2.77	3.40	2.94	3.24	2.57	2.53	2.76	3.06	
3 折りの人格形成上の 意義	3.13	3.36	3.04	3.24	2.47	2.87	2.88	3.16	3.82	2.86	4.10	2.69	3.42	2.78	3.78	
4 宗教的思索の人格 形成上の意義	3.82	4.14	3.66	3.82	3.45	3.84	3.64	3.77	4.20	3.56	3.87	3.28	3.47	3.42	3.85	
5 靈魂不滅の考え	2.60	3.07	2.82	2.86	2.75	2.13	2.62	2.12	3.18	2.65	2.93	2.82	2.96	2.73	3.02	
6 神仏の存在	3.27	3.73	2.72	3.15	2.72	3.78	2.90	3.21	3.70	3.00	3.72	2.85	3.73	2.92	3.72	
7 教会，寺院の現代 的機能	2.76	3.14	3.00	3.15	2.65	2.73	2.80	3.01	3.91	3.04	3.70	2.96	3.50	3.00	3.70	
8 祖先の祭祀の意義	4.14	3.18	3.45	3.76	3.21	3.50	3.60	3.48	3.71	3.48	3.98	3.28	3.58	3.38	3.76	
9 宗教の世界平和への 貢献	3.36	3.23	2.65	2.56	2.90	2.74	2.97	2.84	3.20	2.73	3.13	2.78	2.76	2.75	3.03	
10 宗教家の現代的機能	3.68	3.48	2.62	3.36	3.15	2.93	3.15	3.26	3.88	3.37	3.84	3.28	3.6	3.32	3.77	
11 聖書經典の精神的 支柱性	3.02	3.01	2.69	2.74	2.65	2.72	2.79	2.82	3.05	2.87	2.82	2.63	2.68	2.73	2.85	
12 宗教アヘン説の不当性	3.58	3.70	3.29	3.36	3.13	2.83	3.33	3.29	3.43	3.19	3.81	3.34	3.44	3.25	3.56	
合 計 (宗教対態度 得点)	39.49	40.16	36.73	38.24	34.98	35.10	36.95	37.63	43.40	36.90	43.07	35.70	39.38	36.30	41.84	

先ず表1の大学生全体の男子と女子について，その値
が3.00より明らかに高く肯定的態度の示されている項目
をひろってみよう

項目1. 人間性の弱さ

項目4. 宗教的思索の人格形成上の意義

項目8. 祖先の祭祀の意義

項目10. 宗教家の現代的機能

項目12. 宗教アヘン説の不当性

以上の各項目については大学生男女とも肯定的態度が
みられる。これら項目については，高校生についても同
様に肯定的である。これらのうち，項目4の宗教的な深
い思索を持ち宗教的な信仰を持つことは人格形成上意義
があるという項目は肯定が最も強く肯定されている。思
索を重んずる青年期の特質がこゝにも示されているとい

えよう。項目10の宗教家の現代的機能については、本研究では政治家や実業家などと比較してその現代的機能が劣るものとはいえないかどうかをたずねたものである。そういう相対的比較の観点からの意見としては、宗教家の機能はかなり肯定的に考えられているのである。

(2) 否定的な態度が比較的明確な項目

そのような項目はつぎの4項目であり、肯定的な項目の数より少ない。

項目2. 人知の有限性

項目5. 靈魂不滅

項目9. 宗教の世界平和への貢献

項目11. 聖書經典の精神的支柱性

こゝで問題となるのは、項目2の将来いかに人知が発達しても、宇宙の神秘をすべて解明するほど人知は万能ではないという。人知の有限性が否定された点である。これは1見項目1の人間の弱さが肯定された点と矛盾するように見られる。しかしながら人知の有限性の問題は人間の科学的能力のほとんど無限に近い発達は不可能なことかどうかという問題であり、人間の弱さの問題の方は犯ちを得し悩み悲しむという人間性を問題にしているので、人間の知的科学的能力以上のものを含んだ問題といえよう。したがって前者が否定され後者が肯定されても、根本的な矛盾とはいえないであろう。

つぎにすでにのべたように項目8の祖先の祭祀の意義は肯定されているが、項目5において靈魂の不滅が否定されていることである。これも靈魂の存在を否定しながら、その靈魂を祭ることの意義をみとめるのであるから1見矛盾のように見える。これは靈魂の有無何如にかかわらず、祖先を祭るといことは、その徳をしのび、これに感謝の意を現わすと共に、これにあやかろうとする精神的な行事として青年に受けとられているのであろう。こう考えれば、両者の外見的な矛盾は必ずしも青年にとって本質的な矛盾とは考えられていないといえよう

項目9の宗教の世界平和への貢献の問題は、「科学が進止すればするほど、それと並行して人間の宗教性が高められないと、世界の平和を保つことはできなくなる」という問題である。このような形の発問においては「宗教は世界平和に貢献する」とかという発問よりも、否定的な結果が現われるのは当然であろう。

なぜなら、宗教が世界平和に貢献することを多かれ少なかれみとめるものにおいても、「科学の進歩と歩調をあわせて宗教が発達することが唯一の世界平和への道とは考えない」というものもいるであろう。1したがって項目9の得点が低いということは、そのまま宗教の世界平和への貢献を全面的に否定することにはならない。そ

の点、発問の仕方を結果の解釈において充分顧慮する必要がある。

項目11の聖書經典の精神的支柱性についての項目は、かなり否定的であるが、しかもなお項目4で述べた宗教的思索や信仰の人格形成上の意義は肯定されているのである。これは聖書經典に含まれる非科学的な面やドグマ的性格が現代青年の心情に必ずしもマッチしないことを示すものであろう。しかし同時に、宗教的思索や信仰の人格形成上の意義が肯定されている点からすると、純粋に宗教的なものを求める気持は、現代青年になお根強く内包されているのではあるまいか。

(3) 一定の明確な傾向の見られない項目

宗教的態度に関する12項目の問題の中で、ある集団は肯定的であるが他の集団は否定的であるというように、明確な一定の傾向のみなれない項目がある。それは、つぎの3項目である。

項目3. 祈り人格形成上の意義

項目6. 神仏の存在

項目7. 教会寺院の現代的機能

以上の3項目は集差が著しく、肯定の傾向が見られない。

項目3の祈りの人格形成上の意義については、先ず全体欄から見ると、大学高校とも男子はこれを否定する傾向にあるが、女子においては肯定的である。女子の中でも宗教系の女子高校生において、その価値を認め肯定する傾向がとくに強い。これは宗教系女子高校においては祈りが学校において集団的に行なわれており、動かし難い毎月の宗教的習慣として、生活の中にとけ込んでいるためであろう。ともあれ、祈るといふ宗教行動が宗教的思索というより知的内面的な心理行動よりも否定的であるということは、児童にくらべて青年が一般的に思矛盾であることも致す。

項目7の教会、寺院の現代的機能の問題は「宗教自体は別としても、教会・神仏寺院などは今日そのはたらきを失っており、現代人としてのあなたには役に立たない」という問題形式である。教会・寺院と青年との直接的な結び付きがその中心となっているこの種発問形式においては、祈りという宗教的行動が否定的である以上、当分これに対しても否定的な結果が得られるであろう。表の全体欄によると、教会寺院の現代的機能については、わずかに女子高校生が肯定しているだけであり、他の集団については祈りの人格形成上の意義と同様に、あるいはそれ以上に否定的である。なお教会寺院の現代的機能が否定的であるのに、宗教家のそれが肯定的であるのはすでにのべた発問形式の相違によるのも見逃がいけない

であろう。つまり、前者が自己にとって存在価値がどのようであるかを発問形式であるのに対し、後者は他の社会の人々に較べて存在価値がどのようであるかを問う形式となっている。こうした絶対的な判断と比較判断ではかなりの相違が生ずると考えられる。

2. 宗教的態度の全項目の総合点の考察

以上のべたところは、宗教的態度を測定しようとする12項目の問題それぞれについて、分析的に考察したものである。ここでこれら各項目の得点を総合した得点について考察して見よう。この総合点が何を意味するかについては相当いろいろな見方があるが、ともあれ宗教的態度の強さを示す1応の指標と考えることができよう。

表1の最下役は、この総合的を示すものである。これは12項目の得点の総合点であるから3点×12=36点、1応の宗教的態度の基点と考えられよう。つまり、36点より得点が高いほど、その集団は宗教的態度が肯定的な

意向に強まり、36点より低くなるほど、その逆の傾向がみられると解釈してよからう。

以上の規準によって、表1の合計点欄の数値を考えてみよう。表の全体欄をみると、大学・高校を問わず、また男女別を問わず、いずれも36.00点を上まわっており、宗教的態度は集団的には肯定的であるといえよう。ことに女子高校生は、明らかに宗教的態度に肯定的な線が強いということができよう。

ここで問題となるのは、調査用紙第1面の問題(3)(4)で調査した、信仰する特定宗教の有無と、その信仰の強さに関する調査結果である。

前者は表2に、後者は表3に示してある。先ず表2によると、特定宗教を信仰しているものは、表の全体によると大学生の男女とも30%強であり、高校生は男子は30%弱い女子は50%強となっている。これで見ると、

(表2) 信仰する特定宗教 (人数%)

集 団 宗 教	大 学						高 校 生				大 学		高 校		
	キリスト系		仏教系		一 般		キリス ト教系	仏教系		一 般		全 体		全 体	
	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	男	女
仏 教	12	3	29	22	19	12	0	23	65	22	2?	20	12	22	29
キ リ ス ト 教	18	34	5	5	11	16	67	3	2	2	12	11	18	2	27
そ の 他 の 宗 教	0	8	5	3	4	6	0	4	4	4	16	3	5	4	7
無 宗 教	67	55	54	59	54	36	31	70	28	69	31	58	50	70	39
無 解 答	3	0	7	19	12	30	2	0	1	3	19	7	16	2	7

(表3) 信仰心の強さ

集 団 宗 教	大 学						高 校 生				大 学		高 校		
	キリスト系		仏教系		一 般		キリス ト教系	仏教系		一 般		全 体		全 体	
	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	男	女
強 い	14	24	14	16	7	12	17	8	12	6	9	12	17	7	11
あ ま り 強 くない	25	30	32	33	28	42	56	33	64	14	19	28	35	26	53
全 く な い	34	31	34	30	42	43	15	52	21	59	59	37	34	56	16
反 撥 す る	7	4	7	12	8	3	6	5	1	6	6	6	6	5	7
無 解 答	20	12	13	9	15	0	6	2	2	10	10	16	7	6	11

特定宗教を自分は信仰していると考えているものは、かなり少ないようである。かりに無解答者の半数は特定宗教を信仰していると仮定しても、高校女生徒以外の2つの集団では、その数はせいぜい40%にすぎない。したがって、この資料に関する限り、青年は宗教に対して全体

的には否定的であるということがいえそうで、前の宗教的態度調査の結果とは、1見矛盾した結果を示している。しかし、これは日本の青年が自分は宗教を信ずると公言することをはぶかるような、1種の内向的な態度を持っていることによるとも解し得るのである。そのこと

は、第3表の信仰心の強さの調査からも、推定することができるのである。

第3表の全体的を見ると、特定宗教に限らず、1般的な宗教的信仰心も全くないというものは、高校生では3%強、高校生では女子は5%を超えるが、女子においては16%にすぎないのである。かりに無解答者の半分、および「宗教に反撥する」と答えたものを加えても、高校女子を除く他の3つの集団では、その数いずれも5%に満たないのである。これでも、宗教的信仰に対しては全体的には肯定的はあっても、否定的とはいえないであろう。

なお表2表3を通じて、高校女子は他の集団にくらべて宗教的信仰があつたという結果が現れている。このことは前述第1表の宗教的態度点が、女子高校生において高かったこととも符合するものである。

つぎに、表2と表3について、とくに顕著に現われている集団間の差異について比較してみよう。表2の信仰する特定宗教については、仏教とキリスト教とに集中しており、他宗教はほとんど見られない。今谷氏がわが国の青年について、家庭の宗教的背景(兩種の宗教的背景)の調査したところによると、その約60%は仏教であった。この数値にくらべると青年の信仰する特定宗教としての仏教はかなり減少している。これは1つには、青年のキリスト教に対する信仰を持つものが両視より多いことのためでもあろうが、最高の原因は、特定宗教を持たないものが多いためと考えられる。したがって、青年が成人となり親となった時には、仏教を信仰するものは、現在の親ほど多くはないにせよ、表2に示された数値よりはるかに増大することが考えられよう。

表2でつぎに顕著に現われていることは、宗教系の学校においては、仏教系の学校では仏教信者が圧倒してキリスト教信者が少なく、キリスト教系の学校ではその逆の傾向が明確に現われている点である。ことに、女子においてその傾向が著しいこれはつには女子は男子にくらべその学校的環境の持つ特定宗教に影響されやすいためであろう。しかしそれ以上に、女子の宗教系学校の場合は特定宗教に即した宗教的行事が多く、しかも女子の宗教系学校は宗教的雰囲気を持つ同じ学園の中学から、高校大学へ進むというケースが多いためであろう。この点男子の宗教系学校においては特定宗教に即した宗教的行事もやつ少ないし、また宗教的雰囲気を持つ同じ学園の中学から、高校大学へ進むという場合も必ずしも多くないというのが現状である。

表3について顕著なことは(信「仰の強いもの」と「反撥するもの」とは少なく、「あまり強くない信仰しか持

たないか信仰を持たない」と答えたものが多いという点である。このことは、宗教的態度点が36.00という原点よりは肯定的方向にあるとはいえ、それはほんの僅かであることとも符合している。これで見ても、青年は宗教に対して肯定的ではあるが、それは全体的にはそう強いものではないということで、常識的な見解とし致すところである。

3. 宗教学科学生の宗教的態度について

以上のべた宗教的態度の問題に関しては、宗教学科の学生はどうであろうか。ここでは、某仏教系大学の宗教学科男子学生90名について、その概略を述べよう。

先ず第1表の宗教的態度の各項目に対する答であるが、宗教学科以外の男子学生にくらべて、肯定的な態度を示す項目が増え、否定的な態度ないし明確な傾向を示さない項目が減少していることである。いま肯定的な態度を示す項目を挙げると、つぎの項目である。

項目1), 人間の弱さ	(3.41点)
項目3), 祈りの人格形成上の意義	(3.75点)
項目4), 宗教的思索の人格形成上の意義	(4.29点)
項目6), 神仏の存在	(3.55点)
項目8), 祖先の祭祀の意義	(3.67点)
項目8), 宗教の世界平和への貢献	(4.18点)
項目10), 宗教家の現代的機能	(4.43点)
項目11), 聖書 經典の精神的支柱性	(3.31点)
項目12), 宗教アヘン説の不当性	(4.26点)

以上の肯定された8項目のうち項目3の祈りの人格形成上の意義、項目6の神仏の存在、項目8の宗教の世界平和への貢献、項目11の聖書經典の精神的支柱性の4項目は、宗教科以外の男子大学生においては、逆に否定的な態度が示されたものである。そういう観点からするとこれら4項目については、宗教学科の学生は他の学科の学生と質的に異なった考を持つということができよう。宗教学科の学生は、その本質上宗教的思索と同様に祈りという宗教的行為を強く肯定するのは当為である。また聖書經典は宗教的思想の粹ともいべきものであり、これを深くきわめよとしていた。のが宗教学科の学生であるから、これに精神的支柱性を求める傾向が強いのも当然であろう。宗教家の現代的機能を確信するのと同様に、宗教が世界平和のためになくしてはならないものとする信念を持つことも将来宗教家として立とうと考えている学生である以上うなずける。

以上の8項目以外には、否定的ないし明確な態度の示されないつぎの3項目がある。

項目2), 人知の有限性	(2.74点)
--------------	---------

項目5), 靈魂不滅の考へ (2.94点)

項目7), 教会寺院の現代的機能 (2.92点)

こゝで問題となるのは、宗教学科の学生が靈魂の不滅については、必ずしも肯定しないが、前に述べたように神仏の存在は肯定する点である。これで見ると、彼らの考える神も少くとも靈的、神秘的な存在ではないといえよう。また、教会、寺院の現代的機能についても必ずしも肯定しないが、宗教家の現代的機能は大いに肯定している点である。これは宗教家そのものは別として、現在の寺や教会がかつてのような教育的、社会的機能を果たしていないという峻烈な批判と、将来への大きな抱負とを示すものと考えられよう。

こゝで宗教的態度の12項目の総合点をみると、宗教学科学生の平均点は43.88となっている。表1にみられるように、宗教学科以外の男子学生においては、それは36.95点あるから、これで見ると宗教学科の学生は、そうでない学生よりもはるかに宗教的態度が強いということができよう。なお、他の集団で最も高かった高校女子全体の平均は、やはり表1によると41.84で宗教学科の平均点より低いことがわかる。

この点は、信仰する特定宗教の調査や信仰の強さに関する調査でも同様である。信仰する特定宗教の調査においては、宗教学科以外の肯定宗教を持つ男子大学生は50%約強であったのに対し、宗教学科学生は93%のもの

(表4)

ばっている。信仰の強さについても、無解答と信仰全くなしが、前者では50%を超えたのに対し、後者の宗教学科学生では8%にすぎない。ただし宗教学科学生においても信仰の場合が「強い」と答えたのは3%強で、過半数はあまり信仰度は強くないとしているのである。この点宗教学科の学生といえども一方においては信仰の強さを敢て公言しない一般的傾向があると同時に、他方においては現代青年に一般的にいえる宗教的信念の欠如がみられるように思われる。

〔研究結果その2〕 青年の生活態度について

こゝでは本稿末尾にある附録「意見調査用紙」の第2面の各問題項目の集計結果について考察を加える。第4表がその集計結果である。集計の仕方は〔研究の方法〕のところでのべてあるが、簡単に再度説明しよう。表の各集団別の各項目毎の得点であるが、これは各個人の得点を1定の規準にしたがって、1点から5点までの5段階点で採点し、集団別にその平均点を求めたものである。たとえば、キリスト教系大学の男子集団の禁酒禁煙の問題項目の点は2.49点である。これはこの集団の平均点でいうと、禁酒禁煙を示す場合が2.49点であるということである。なお得点範囲は理相的には禁酒禁煙を絶対的に肯定する場合が5.00点、絶対否定する場合が1.00点であり、肯定とも否定ともつかない中間的な原点が3.00点である。したがって2.49点は禁酒禁煙の生活態度をかな

	大 学 生								高 校 生							
	キリスト教系		仏教系		一 般		全 体		キリスト	仏教系		一 般		全 体		
	男	女	男	女	男	女	男	女		女	男	女	男	女	男	女
1 禁酒, 禁煙	2.49	2.44	2.65	3.00	2.51	2.68	2.57	2.71	2.15	2.82	3.49	2.59	3.58	2.71	3.07	
2 純精神的婚前交際	1.91	2.65	2.49	3.03	2.69	3.14	2.36	2.94	3.05	2.74	3.53	2.16	3.48	2.47	3.35	
3 離婚の禁止	2.74	2.96	3.26	2.99	2.80	3.10	2.93	3.02	2.85	2.79	3.07	2.94	3.38	2.87	3.10	
4 自衛戦争非協力	3.34	3.32	3.33	3.56	2.95	3.28	3.21	3.39	3.14	2.97	3.48	2.57	3.91	2.77	3.51	
5 自衛軍備廃止	4.06	4.01	2.91	3.94	3.74	3.46	3.57	3.80	3.76	3.46	3.86	3.63	4.03	3.55	3.88	
6 絶対的平和外交	2.96	3.58	3.41	2.56	2.74	2.91	3.04	3.02	3.97	2.98	3.63	2.87	3.49	2.93	3.71	
7 親子心中絶対禁止	3.97	4.23	3.33	3.52	3.43	3.62	3.49	3.72	4.14	3.43	3.77	3.85	3.77	3.64	3.89	
8 死刑廃止	2.79	3.15	2.63	2.51	2.45	2.85	2.72	2.94	2.81	2.86	2.17	2.33	2.33	2.60	2.44	
9 墮胎禁止	2.95	3.47	3.07	3.94	2.67	3.07	2.90	3.49	3.40	3.24	3.65	3.19	3.27	3.22	3.44	
10 妻の職職業的自由	2.18	2.22	2.08	2.21	2.25	2.38	2.17	2.27	1.61	2.61	1.59	2.31	1.42	2.46	1.54	
11 劣等民族の滅亡救済	3.69	3.21	3.49	3.34	3.29	3.19	3.49	3.23	3.23	3.35	3.52	3.24	3.57	3.30	3.44	
12 貧困者の無条件救済	3.39	3.12	3.07	3.01	2.86	3.16	3.11	3.08	3.33	3.15	2.70	3.30	3.52	3.23	3.18	
合 計	36.47	36.47	35.75	37.61	34.38	36.84	35.56	37.61	37.44	36.40	38.51	35.10	39.75	35.75	38.55	

り否定する態度があるということになる。

1. 各問題項目別の分析

生活態度に関する12の問題項目は、附録調査用紙第3面の問題を詳細に読めば明らかであるが3項目づつれ分類することができる。禁欲主義的生活態度、平和主義的生活態度、人命尊重的生活態度および平等主義的生活態度の4分類がこれである。したがって便宜上各分類単位に考察してみよう。

(1) 禁欲主義的生活態度について

項目1から3までがこれである。表4によれば項目1の禁酒禁煙、項目2の純精神的婚前交際については、これを否定する傾向が各集団ともかなり強い。これは禁酒禁煙については「たとえ好きであっても」という条件が付き、純精神的婚前交際についても「ロづけさえも」という。厳しい条件がついている。こうした発問の仕方により、たゞ漠然とした禁酒禁煙や純精神的婚前交際云々とは異なる要素が入り、否定的な答が多かったという面も考えられよう。しかしいづれにしても現代青年の大勢はこうした方面の禁欲的態度はどちらかといえば弱いということがいえよう。もっとも女子高校生については、キリスト教系のそれを除き、かなり肯定的であることが表から何える。これは女子高校生においてはこの方面の問題は日常生活で常に直面する現実的な問題ではないという点と、年令的に清純な理想主義的傾向の強い点、さらにはわが国女子特有の自我抑制的傾向などによるところが大きいであろう。

項目3の離婚の禁止は表4の全体欄によると、大学・高校男女の別なく30点に比較的近く、明確な肯定ないし否定の傾向があらわれない。他の禁欲主義的生活態度の項目に比較すると、相対的には肯定的方向に近づいている。これは単に禁欲の問題だけでなく民主社会における人間の基本的な、自由につながる問題でもあるところに、比較的肯定にかたむく理由を求めることができよう。なおこの項目は男子より女子の方がやゝ否定傾向が強くなっているが、離婚を必要とするようなしいたげられた立場は女子に圧倒的に多いという。わが国の社会的事情を反映しているものといえよう。

(2) 平和主義的生活態度について

平和主義的態度に関する問題項目4から6については、概して肯定的な戦線が強く現われている。表4の全全体欄によると、今日再軍備の方向に漸次動きつつあるが自衛のためとはいえ軍備は現状よりさらに縮少廃止の方向に進むようにいう線が強く現われている。青年層の平和主義的態度、ことに軍備反対の態度は相当根強いものがあるように思われる。自衛のための戦争とはいえ、

これに非協力だという考えかたも肯定されているが、これは軍備の項目ほど強くはない。これはすでに国家の方針として戦争が始まり、しかも自衛のためという正義の条件も加わっていることを考えると、こゝにも青年の平和主義的態度の強さが示されているといえよう。項目5の絶対平和外交の問題は「わが国の漁船や乗組員の不当な逮捕・抑留をする韓国のやり方に対して、われわれは武力的斗争に立ち至る恐れのあるような強い態度は示すべきではない」という設問である。平和主義的生活態度に関する他の項目の問題が、実現性はあっても目下のところ観念的に考えられる問題であるのに対し、韓国問題は調査当時現に新聞雑誌で報道され、国民感情を刺戟しつつある問題であった。したがってこの問題項目に対しては、冷非な知的観念的思考の他に、感情的なものが判断に加わったと考えられる。これが平和主義的生活態度のこの問題項目が、他の2項目にくらべて肯定的態度が強く示されていない有力な理由といえよう。

平和主義的生活態度の問題項目は、全般的に男子より女子の方が強く肯定的態度を示している。主婦達の平和運動にもみられるように一般的に女子は男子より平和主義的生活態度が強いとことを、この結果も裏書きするものであろう。

(3) 人命尊重的生活態度について

問題項目7から9に現われている。人命尊重的生活態度は、表4によると、いかなる場合にも親子心中を禁止するとよう項目7において最も強い肯定的態度を示している。これに対しいかなる罪人に対しても死刑は廃止せよという項目8の絶対的な人命尊重主義的生活態度には、否定的な態度がかなり明確に現われている。ことに、宗教的態度に関する項目や生活態度の他の項目全体に対して肯定的態度の最も強かったし高校女子が、この問題に限り甚しく強い否定的態度を示していることが目立っている。これは女子高校生においては、恐悪犯罪に対する憤りと恐怖という感情的なものがあまりにも強く印象づけられるという心理的なものが、その原因ではなからうか。

最後に項目9の墮胎禁止の項目であるが、これは現実の社会では産児制限、個人の家庭経済その他の理由で、かなり墮胎が行なわれているのが現状であろう、しかし表4によると、墮胎禁止にかなり肯定的であり、特に女子において著しいこれは観念的思考の領域にとどまる限りでは、墮胎禁止という人命尊重の態度が、強いがいざ現実の生活においてこれに直面すると、現実の力に押し流されることを示すものであろう。その精神力学的構造は、すでに述べた平和主義的生活態度の項目における、

「自衛戦争非協力と絶対平和外交」の間の力学構造と同様である。前者は「かりに自衛のために必要な戦争がおきたとして」という仮定の上立つ観念的思考の場であるが、後者は「現に韓国がわが国の漁船や乗組員をだ捕抑留している」という。現実の具体的な背景を持った問題なのである。

(4) 人間の平等主義的生活態度について

項目10から12までの平等主義的生活態度の項目では、項目10の妻の職業的自由の問題に著しく否定的態度が示されている。表に見られるように妻の職業的自由の否定は、男女の別・大学高校の別なく、かなり強いことがわかる。とくに高校女生徒の得点は1.54であるから、非常に強く否定されている。その理由を考えるために問題文をかかげると、「夫が戦場で心おきなく働けるように妻はその理想のいかんにかかわらず、家庭にあって家庭生活をととのえることを第1とすべきである」……これが問題文である。ここでいう「理想のいかんにかかわらず家庭にあって」ということは、現に多くの既婚婦人が従事している。教師その他の職業にたざさわすることを否定するものといえよう。1つには「良夫は外で妻は内に帰って」というわが国の伝統的な家族的習慣が青年の心に意識的にも無意識的にも強く残っているためであろう。他の理由は問題文の「妻はその理想のいかんにかかわらず」というかなり抽象的な表現を用いた点で、これをこれをこれこれの職業にたざさわっているが、それを止めてもというように、具体的に記述してないことも挙げられよう。それにしてもこの項目に否定的態度が強いということは、女子自身の職業意識や職業的責任観の低さとこれを温存することを喜ぶような男子の意識の存在が考えられよう。

項目11の劣等民族救済、項目12の貧困者の救済については、平等主義的生活態度を示す肯定的な態度が強く、人命尊重の生活態度に関する死刑廃止の項目8に否定的態度が強かったのと対照的である。

2. 生活態度に関する項目の総合点の考察

表4の合計欄は、生活態度に関する12項目の総合点である。この生活態度点は、宗教的態度点と密接な関係のあることを始め想定していた。何となれば、宗教においては禁欲主義・平和思想・人命尊重・平等観などが、一般的には重んぜられるからである。表4によると、集団の得点平均については宗教的態度と生活態度との間に、必ずしも密接な関連がみられないようである。というのは男女を比較すると女子の方が得点が高いという点は宗教的態度点の場合と似ているが、宗教系学校と一般の学校を比較したとき、宗教系学校の方が高いということは、

生活態度点については必ずしもあてはまらない、それどころか高校女子については、一般系学校の方が得点が高いという逆の態度さえみられるのである。また宗教的態度点においては、圧倒的に他の集団より高い得点を示した宗教学科の男子学生においても、生活態度点では36.88点にすぎず、必ずしも他の集団より高いとはいえない。このようなわけで、宗教的態度点と生活態度点についての集団別の比較においては、そこに密接な関連性があるとはいえないのである。このことは、「青年においては宗教的態度と禁欲主義平和主義平等主義等の生活態度との間に密接な関連性がない」というように置きかえ得るであろうか。そのような置き換えは不可能であろう。その理由はつぎのとうりである。

第1には、宗教的態度と生活態度の測定用具の妥当性に関する問題がある。つまり、ここで用いた宗教的態度スケールが、果して真の意味の宗教性を測定する妥当な尺度であるかどうか。また生活態度スケールも禁欲主義平和主義等の生活態度を真に測定し得る尺度であるかどうか。この点についての十分な検討がなされていないのである。

第2に、上述の妥当性の点は1応満足すべきものであるとしても、ここで問題にしているような生活態度に対する態度を決定する要因は多様性を持つという点である。つまり、宗教的態度いかんも生活態度決定の要因といえようが、その他にも生活態度決定の因としては近代的な合理的精神現実主義的精神など、いくつかの要因が作用しているであろう。これらの要因のはたらき方によっては、たとえ宗教的態度と生活態度に本質的には密接不可分な関係あっても、外部的に宗教的態度の影響が、そのまま生活態度点には現われないのである。

宗教的態度調査

○つぎの各問題の意見に、賛成かどうか答えてください。答の仕方は右側の四角のわくの中に、つぎの記号を記入いたします。

1. 非常に賛成という時は①と書く。
2. かなり賛成の時には、②と書く。
3. わからない時、または何ともいえない時は③と書く。
4. 大体は反対という時は④と書く。
5. 絶対に反対という時は⑤と書く。

(Iの1) あやまちを犯したり、悩み悲しむことは人間の常であり、そういう意味で人間としてのあなたは、弱き存在である。……………

生活態度調査

- (Iの2) 人間の知恵には限りがあり、将来いかに人知が発達しても人間が宇宙(うちゅう)の神秘をすべて解明できるほど、人知の万能は期待できない。……
- (Iの3) 神仏に祈るということとは、あなたの私心を除き、あなたの人知を完成する上に大切な行為である。……
- (Iの4) 特定の宗教を信仰することに別として宗教的な深い思索と信仰を持つことはあなたの人格の向上に大切な行為である。……
- (Iの5) 人間の肉体は死によってほろびるが、人間の靈魂(たましい)についても同じことで、靈魂の不滅(たましいはほろびないこと)は信じられない。
- (Iの6) 神や仏は人間がかってに考え出したものであり、したがってあなたが何らかのかたちの神仏が存在すると考えるのはばかげたことだ。……
- (Iの7) 宗教自体は別としても、教会・神社・寺院など今日ではそのはたらきを失っており、現代人としてのあなたにはこれらは役に立たない。……
- (Iの8) 葬式(そうしき)や先祖(せんぞ)のお祭を行うことは、昔から行われた形式的な風習にすぎず、現代人としてあなたには意味のないことである。……
- (Iの9) 科学が進歩すればするほど、それと並行して人間の宗教性が高められなくなり世界の平和を保つことはできなくなる
- (Iの10) 宗教家は、学者・政治家・実業家・芸術家などにくらべて、社会の発展と幸福のために果たす役割は少しもおとるものではない……
- (Iの11) 聖書やお経の中には科学的常識では考えられない不合理なところがあり、あなたはこれらを心のよりどころとすることはできない。……
- (Iの12) いかなるかたちの宗教にせよ、宗教はアヘンのようなもので、あなたの本当の幸福には宗教は役に立たない。……

- (IIの1) あなたは酒やたばこは好きであってこれらのものはやめるべきである。……
- (IIの2) ロづけ(キス)のようなことは、正式の結婚前にはたとえ愛し合っている相手とでも、あなたはこれを行うべきではない。……
- (IIの3) 結婚後二、三年も努力を重ねたが家庭生活がしっくりゆかない時には、結婚の当事者としてあなたは離婚して新しい人生に進むべきである。……
- (IIの4) 自衛のための戦争が始まったならば、国民の一人としてのあなたは政府の方針にしたがって、戦争に協力すべきである。……
- (IIの5) 世界各国とも強力な自衛の軍隊を持ち各国の強力な武力の均衡(つりあい)の上に世界平和をきずくために、わが国もかなり強力な軍備を持つべきである。……
- (IIの6) わが国の漁船や乗組員を不当に捕・抑留する韓国のやり方に対しても、われわれは武力戦争にたち至るおそれのあるような強い態度は示すべきでない
- (IIの7) 貧困(まずしき)と病苦のどん底にある親が、かたわな子どもを一人だけ残して生苦しみ通させるよりはと考へ、死の道づれにするのが正しい。……
- (IIの8) 悪質な殺人犯人であって、今後といえども社会に害毒をながすおそれのあるような人は、死刑にすべきである。……
- (IIの9) 産児制限は社会の強い要求ではあるが何人子どもがいても、親としてのあなたは、胎児(生まれる前の母胎内の児)を、医師にたのんでおろすべきではない。……
- (IIの10) 夫が職場で心おきなく働けるように、妻はその理想のいかんにかかわらず、家庭にあって家庭生活をととのえことを第一とすべきである。……
- (IIの11) 劣等民族のほろびるのは生物学的な原則にしたがうといえようが、劣等民族がほろびてしまわないように、われわれはは税金の一部でこれを保護すべきである。……

(Ⅱの12) なまけたり不摂生(ふせっせい)をしたために貧困・病弱となった人々に対しては、あなたはわこれを救うための寄付や奉仕運動をするにはおよばない

第二部 青年の友人関係と友情観

〔研究の自的・方法〕

青年期の望ましい友人関係は、お互に青年の精神的支柱となり、人格形式によい効果を及ぼすものとされている。反対に、青年期の望ましくない交友関係が、青年が悪に落する一契機となっていることは、今日新聞紙上ににぎわしている多くのハイ・ティーン犯罪にも明らかなことである。

このように、人格形成上大きな意味を持つ青年期の交友関係と友情観について、その一端を解明するために、本研究は行なわれた。青年の交友関係の指導に有効な知見が、いさゝかなりとも得られるなら幸である。

被調査者は、男女大学生であり、年令的には19才～20才を山として、(約48%)、17才23才に涉っている。男子は東京3校北海道2校女子は東京4校(内3校は女子短大)で、各校100名内外である。現住所が自宅のものは男女とも半数弱、寮・下宿のこりりの半数をほぼ2分している。

調査期日は、1960年(昨年)の秋であり、質問紙法により、学級単位に実施した。知人の心理的担当教授に主として実施を依頼した。

本研究を遂行するに当っては、本学の、照谷幸子・中村敏子の両子の御協力に負うところが大きい。

以下のところで、研究結果を中心に、考察を加えてみよう。

〔研究結果その1〕友人関係

1. 友人結合の強さ

被調査者	親しさの 度合	親友	かなり 親しい	普通の 友人	友情観 尺度点
男子ら4校		35%	47%	12%	19.3点
女子B4校		15%	61%	24%	19.5点
T T 大(男)		18%	63%	22%	19.6点
T G 大(女)		6%	77%	17%	20.6点

「あなたの現在最も親しく交わっている友人は、どの程度の親しさですか」という問を設け、表に見られる3段階のいずれに当るかを調査した。これによると表に見ら

れるように、男女大学生とも親友、ないし、親友ほどではないがかなり親しいと考えている友人を持つものが多い。男子大学生は女子大学生にくらべ、友人結合強いように思われる。しかしながら、これは男子にくらべ女子は控え目という傾向も伝っているように思われるそのことは友情観尺度の得点については、表に見られるように男女による得点差が見られないことから伺える。この友情観尺度は後に説明があるが、友情観に関する設問20題から成り立っており、得点が高いほど友情を重んずることを示すものである。したがって、友情観尺度の得点に男女差が見られないということは、男女同等に友情を重んじているということである。

表の中でT T 大(男)とT G 大(女)の結果を見るとそれぞれ他の男子校、女子校より、親友ありの答が少なくなっている。これは他の各校がほぼ同程度の%を示しているのに、この2校だけが例外的であったので、とくに表示したものである。ところで、親友を持つもの%の少ないこの2校においても、他の大学と同様に友情観尺度の得点は高い。これで見ると、親友が少ない%を示すグループ必ずしも友情を軽んずるわけでないことが明らかである。

2. 友人結合の時期

被調査者	時期			
	大学	高校	中学	小学 それ以前
男子5校	45%	38%	13%	4%
女子3校	28%	50%	14%	8%
T G 大(女)	59%	27%	10%	4%

現在最も親しく交わっている友人について、友人となった最初の時期、つまり友人結果の時期を調べたのがこの表である。男子5校はいずれも同様な結果を示し、女子も4校中3校は同様な結果を示し、ただ女子1校だけは他の女子3校と異なる傾向を示していた。そこで男子校は一括して平均を示し、女子校は傾向の異なるT G 大学は別にして、他の3校は一括して表に示した。

表によると、中学ないしそれ以下の時期に友人となり、大学在学中の現在も依然最も親しい友人関係を持っているというケースト先ず2制弱と少ないようである。しかしながら、高校時代に友人となり、しかも大学生である現在もその友が最も親しいという友人結合は、男子4校女子5校とかなり多いようである。高校を卒業してからはまだ1～3年という時間的距離の近いことも、高

校時代の友人結合が大学在学中の現在高率を示している一つの有力な原因といえよう。しかしそれ以外にも、高校時代の友人結合には、何か永響性を持たせる要因があるに相違ない。それは、小学校においては家が近いとが学級で座席が近いといったような接近要因による友人結合の%が多いのに対し、中学を経て高校に進むにしたがい性格・趣味・思想のような精神的要因による友人結合の%がいちぢるしく増大する。この精神的要因による友人結合は偶然的な接近要因による友人結合より強固な結合を作る。こうした点にも、高校時代の友人関係は、中学以前の友人関係にくらべて大学時代まで永響性を持つ理由が考えられる。

友合結合の時期について男女の比較をしてみると、男子学生にくらべると女子学生の方は大学に入ってから最も親しい友人を持つ%が少くなっている。これは裏返せば女子の友人関係は高校時代には男子の場合より強固であるということでもあろうが、すぐ親しい友人結合を持つような時間的性格は男子に強く女子にやつ弱いことを示すものであろう。

たゞし、表によるとTG大学の女子学生のみについていえば、5校の男子学生以上に大学入学後の友人結合の%が増大している。これはTG大学は男女共学であり、女子学生は学級人数の3~4割にすぎない。そこでいわゆるマイノリテグループ意識が強く作用し、学級内の女子学生の間には強いグループ意識が生ずることが考えられる。これが他の女子学生グループと異り、TG大女子学生にのみ、大学入学後親しい友人関係が急速に生ずる原因であらう。

3. 友人結合における年齢関係と性別関係

被験者数	年齢関係			性別関係	
	同輩	年長	年下	男子	女子
男子4校	71%	16%	13%	92%	8%
女子4校	76%	14%	10%	9%	91%
RS大(男)	48%	8%	44%	62%	38%

現在最も親しい友人について、その年齢関係と性別関係を調したところ、表のような となった。年齢関係では、男子校、女子4校の各グループはほぼ同傾向を示し、同年輩のものが7割強と圧倒的に多く相手が年長ないし年下の場合は共に1割強にすぎない。これで見ると大学生における友人結果の要因としての年齢要因は、児童の場合もそうであるが、かなり強いように思われる。

しかしここでいう年齢要因は単に暦年齢の近似を意味するだけのものではない。現在大学在学中のものは、少くとも高校一年の時以来、精神年齢も、家庭環境も、したがって思想的にも一般青年以上に類似した学生集団の中に生活し、その集団内の生活が生活時間の大部分を占めている。したがって大学生の友人結合における年齢要因は、同時にこれらの各要因を内に包含するものといえることができる。

つぎに性別関係であるが、表に見られるように男子4校では9割強が同性の男子であり、女子4校についても9割強がやはり同性の女子となっている。性別が友人結合の極めて強い結合要因であることは、この数値に明らかである。男女交際が自由でありその機会にも比較的恵まれている今日の大学生とはいえ、最も親しい友人に関する限り同性であるというこの事実は注目すべきことである。

ここで男子大学生群中特異な傾向を示すものとして、RS大のケースがある。表に見られるようにRS大男子の場合は年齢関係においても同年輩と年下の友人とが相中ばし、性別関係においても同性・異性の区別があまり目立っていないという、特異な傾向を示している。いいかえれば、同年輩の同性との友人結合という一般的傾向の他に、年下の異性との友人結合ということがかなり明らかに見られるのである。その理由は、本調査の関する限りでは全く推定を行なうこともできない。たゞRS校は本調査の対象となった他の男子4校にくらべると、いさゝか特色がある。それは入学試験の倍率、在学生の家庭的背景大学の気風と教育課程等に関してである。

以上のように、最も親しい友人は同性であり、年齢的にも接近していることが、男女を問わずわが国大学生一般の傾向である。ところが、トーマスとヤングがアメリカの大学生676人について調査したところでは、これと相反する傾向が表に見られるように現われている。

アメリカ大学生の友人関係

友人		自分	
		男	女
一ばん好きな人	友	男 108人	173人
	人	女 153人	148人
一ばん嫌いな人	友	男 217人	108人
	人	女 53人	201人

表によると番好きな友人の過半数は、アメリカでは男女学生とも異性であり、わが国大学生の場合とは異なる。この調査は男女共学の大学の学生についての調査であることを考慮しても、異性間の友人結合はアメリカではわが国にくらべ比較にな

らないほど強いことがわかる。

交友の動機

調査結果を挙げると、最も多いのは「話しているうちに自然に」「同級生で何となく気があって」等の解答である。これらの解答は、男女大学生とも、3割強となっている。これらの解答の背後には、いつもつきあえるという地理的接近の要因があるが、それは単に地理的接近要因のみを示すものではない。少くともそこには、何らかの心理的共感の要因を含む解答といえよう。

「共同生活を通して」「一諸に勉強をして」などの解答にも、同様に、単なる地理的接近要因だけでなく、心理的共感の要因が含まれているが、この種の解答は男子9%女子4%となっている。同様な要因によるものとしてはこの他に、「趣味の一致」「クラブ活動」「慰め合う」などがあり、明らかに地理的接近要因が中心となっているものとしては、「近隣だから」「通学方向が同じだから」がある。この地理的接近の要因を交友の動機とするケースは児童では非常に多いが、大学生ではかなり減少している。具体的には、表に示す%となっている。

要動機	性別	
	男子大学生	女子大学生
1. 話し合っているうちに	33%	34%
2. 共同の生活学者	9%	4%
3. 趣味	9%	22%
4. クラブ活動	17%	9%
5. 慰め合う	5%	10%
6. 近隣通学方向	15%	6%
7. 無解答	12%	15%

表によると趣味が交友の動機となっているケースは女子に多く、その大部分はハイキングと音楽会である。他方男子大学生ではクラブ活動に交友の動機を持つものが比較的多く、この点男女におけるレクリエーション

活動とクラブ活動とに対する比重の大きさの相違が端的に示されている。

5 友人間の性格

性別	性格		
	似ている	反対	わからない
男子大学生	34%	24%	32%
女子大学生	32%	35%	33%

友人結合には、性格的に類似していることがプラスに働くか、それとも相反する性格の方がプラスに働くであろうか、この点を知るために、最も親しく交わっている

友人と自分の性格の類似度を「似ている——反対——はつきりしない」のいずれかで答えさせた結果が表の数値である。このような単純な方法により、友人間の性格的類似度を十分に測定し得るとは考えていないが、少くとも大学生が自己と友人の性格の類似度をどうみているかはわからう。表によると、男女大学生とも、三つの解答%のがほぼ等しくなっている。これで見ると親しい友人関係は必ずしも類似の性格者間に生れ易いとはいえないようである。同様に反対の性格のもの間に生じ易いということもできないし、この二つの場合以外に生じ易いともいえないようである。たまため自己の欠点を補うような性格の反対者がおれば、そこには親しい交友かが生ずるし、類同の性格の相手でも気が合えば交友関係が深まる。このように性格そのものが問題となるのではなく、人間関係の力学的位置が問題となるようである。

友人の好きな点

好きな点	被調査者	
	男子	女子
1. 淡泊	26	18
2. 親切	13	16
3. 明朗	8	15
4. 誠実	15	8
5. 大胆	9	9
6. 温和	8	6
7. 積極性	4	5
8. 冷静	4	8
9. 美貌	0	7
10. 素朴	2	2
11. 無答	11	6

最も親しい友人の好きな点は、表に見られるような10性格特徴に分類できる被調査者の性別により多少の相違はあるが、性別に関係なく、かなり共通した傾向が見られる第1位は淡泊さであり、こだわりのないさっぱりした点が好まれるわけであることに男子大学生

では、友人のこのような気安さが多く求められていることが特徴的である。第2位は親切さであり、これも、男女共に好む点である。これに対して第3位の明朗さは女子大学生の方が多く、同じく第3位の誠実さは反対に男子大学生に多い。

〔研究結果その2〕友情観

すでに研究結果その1の始めの部分で、表について説明したように、友情観尺度の得点は男子5校女子4校のグループとも19点内外であり、グループ差はほとんどないしかしながら、この尺度を構成する個々の問題項目を分析すると、そこには明らかに男女による相違は、少くとも見られるのである。以下のところで、この友情観尺度の項目分析の結果を示そう。

問題1) 友情は、お互の利害関係が一致する場合のみ、成立することができる。

	賛成	反対	不明	得点
男子	12%	73%	15%	2.6
女子	25%	55%	20%	2.3

問1では多くのものは「反対」という意見である。つまり、友人関係は利害関係

を超えて存在するという考えが強い。友情を最も肯定する場合を3点、最も肯定する場合を1点として、友情点を算出すると、表にみられるように男女とも中間の1.5点をはるかに越えているとくに男子は2.6点で、かなりこの考えが強いが女子は2.3点であるから、そう強くこの考えを支持してはいない。(男子の得点はつぎのようにして算出した。反対×3+不明×2+賛成×1=

$$0.73 \times 3 + 0.15 \times 2 + 0.12 \times 1 = 2.6)$$

問題2) 友情は、それによって拘束を受けるわずらわしいものである。

	賛成	反対	不明	得点
男子	8%	80%	12%	2.7
女子	6%	73%	21%	2.7

こゝでも「反対」の%が多く束縛性があるからといって友情を否定するよう

な考え方は少ないことがわかる。問の場合と同様にした友情点を算出すると、男女ともに2.7点であり、この面では男女差が見られない。

問題3) 友情は、お互にその人格をたかめあうものである。

	賛成	反対	不明	得点
男子	79%	5%	16%	2.7
女子	75%	8%	17%	2.6

こゝでは「賛成」の%が多く友情というもの

が人格形成上大切な働きをすることをみとめている。友情点は男女とも1.5の中間の点よりかなり高いことがわかる。

問題4) 友情は、自己の必要と要求を満たすところに本来の目的がある。

	賛成	反対	不明	得点
男子	25%	46%	29%	2.2
女子	22%	53%	25%	2.3

こゝでは、
「反対」の%がやや傾く、友情は自己の必要から生れる利己的性

格のものという考えは否定される傾向が強い。友情点は男子2.2点、女子2.3点で、共に中間の1.5点よりは高いが、これまでの問題項目の得点にくらべるとやや低い、つまり、友情の本質は利己的なものではないとする考え方に傾いてはいるが、明確に利己的なものではないといふ切るまでには致っていないのである。

問題5) 友情は、相手と一体感を持ち、苦楽を分かち合うことを可能にする。

	賛成	反対	不明	得点
男子	60%	14%	26%	2.4
女子	61%	17%	22%	2.4

こゝでは「賛成」の%が多く友情は苦楽を共にする一体的なものとする考え

がやや強い。得点は2.4であり、問題4の場合と同様でこの考えは認められてはいるが、そう強くはないようである。

問題6) 友情は、恒久的なものであり、一生の間ほとんど変わらないものである。

	賛成	反対	不明	得点
男子	47%	19%	34%	2.3
女子	51%	19%	30%	2.3

こゝでは、最も%の多いのは「賛成」であり、友情は恒久的なものとする考え

方がやや強いことがわかる。しかしながら、賛成は約半数のものしかなく、友情的も2.3点にすぎないので、友情の恒久性を支持する考えはそれほど強いとはいえない

問題7) 友情は、これを強く求めるほど価値あるものではない。

	賛成	反対	不明	得点
男子	17%	62%	21%	2.4
女子	20%	48%	32%	2.3

こゝでは「反対」の%がやや多く、友情はやはり強く求めよとする考えがやや強い。得点は2.3~2.4点であるから、友情を求めることが特に痛切というところまでにはいたってはいないといえよう。

問題8) 友情は、親子兄弟の愛にもまさるほどのものである。

	賛成	反対	不明	得点
男子	44%	22%	34%	2.2
女子	47%	13%	40%	2.3

こゝでは「賛成」の%がやや多く、友情は親子の愛にもまさるといふ考えが

やや強いことがわかる。しかしながら、友情点は2.2~2.3点であり、この考えはやはりそう強く支持されているとはいえないようである。

以上8の面から、男女大学生の友情観を調べてきた。それによると最初の3つの面では、先ず友情を重んずる考えが強いといつてよからう。後の5つの面でも友情を肯定的に眺めていることに変わりはないが、その肯定の度には少々低いことが何えるのである。全体としての大学生の友情観はその価値を認め、これを重んずる方向に向かっていることがわかる。